

思春期を、家族はどう支えられるのか？

(社)日本自閉症協会東京都支部副支部長

尾崎 ミオ

1. アスペルガー症候群・高機能自閉症の子どもたちと、その家族

私の周囲のアスペルガー症候群・高機能自閉症(以降、アスペルガーと呼ぶ)の子どもたちは、個人差こそあれ、皆、とてもセンシティブでデリケートだ。感覚の過敏や成長のアンバランスさがバックボーンにある故に不安が強く、ちょっとしたことで傷つきやすく、壊れやすい。だから、アスペルガーの子どもがいる家庭は、「薄い氷の上を、歩くような生活をしている」と感じることもある。

たとえ、一時的にうまく行っているように思えても、ちょっとしたキッカケで、パニックがひどくなったり、学校に行きたがらなくなったり、こだわりが強くなったり……。何が起きるか予測できないのが、アスペルガーの子どもとの生活である。

そんな波乱万丈の生活を楽しみながら育児をするためには、めったに動揺しない図太い神経と、オルタナティブな感覚が大切だ。つまり、学校公開日に衆人環視のもとパニックを起こした子どもを、担任から「お母さん、連れて帰ってください」と言われても、決して怒らず、穏やかに「学校にいる間は先生にお任せします」と返す勇気や、「息子さんが、校庭に埋められたウサギの死体を掘り返して観察してます」という学校からの電話連絡を、「それは素晴らしい理科体験になりますね」と笑って聞き流す機転が必要になる。

この程度のことで落ち込んでいると、アスペルガーの親の身はもたないのである。

また、この子たちは、想像される以上に、周囲の大人の反応に敏感だ。「なぜ、自分のやったことがいけないのか?」「どうして怒られているのか」は理解できなくても、周囲の大人が自分をどのように評価しているのか……については、過剰に反応してしまう。大人が動揺し、悩んでばかりいると、「自分は迷惑な存在」「皆を困らせている」と、子どもの自己評価を下げる原因になる。だからこそ、必要以上に神経質な大人の態度は、子どもの成育環境にマイナスでこそあれ、プラスではない。多くの場合、「彼らの行動に悪意はない」ということを認識したうえで、大人は寛容に対応する方がいいと思う。

2. 思春期という大きな壁

ただでさえも、不安定要素を抱える家族にとって、アスペルガーの子どもの思春期は、深刻に考えられがちだ。確かに、思春期を迎えて「学校に行けなくなった」「自傷が始まった」「親に暴力をふるう」「強迫神経症などの症状がひどくなった」など、さまざまなネガティブ報告を聞くことも多い。

けれども、あまり悲観的に捉えて、過剰反応することは、必ずしも子どもにとって良い影響を与えない。思春期は、どの子どもにとっても、必ず存在するものであるし、自我を確立していくうえで、超えなければならない壁である。特に、“自己認知が、成人期の生活

に大切な要素となる”と考えられている、アスペルガーの子たちにとって、この壁を越える作業は、“かけがえのない体験”でもあるのだ。

とはいえ、必要以上に自分や他人を傷つける行動を放置しておくわけにはいかない。ここでは、私たちの部会で報告された主なトラブルについて考えてみたい。

1) 障害の自覚と告知

早い子だと5～6歳で「自分は他の子と違う」ことを意識している場合もあるが、概ねは10歳頃から、周囲と比較しながら自分を捉えようとし始める。アスペルガーの子どもの場合、極端に運動が苦手だったり、どうしても苦手な教科があったり、友だちと共通の興味をもてなかったり、休み時間の雑談の輪には入れなかったり……、さまざまな事象からコンプレックスを抱えやすい。

思いをうまく表現できない苛立ちで極端に暴力的になる子もいれば、逆に人から欠点を指摘されることを恐れて、自分の殻に閉じこもってしまう子もいる。

この時期になると“障害を子ども自身にどう伝えるか”ということが課題として取り上げられるが、私は、大人の都合でセッティングされる「告知ドラマ」には疑問を覚える。確かに、障害というスケールを与えることで、自己認知が容易になるというメリットはあると思う。しかし、「私はコミュニケーションが苦手なんだ」と思い込んでしまったり、「障害があるから、できないかもしれない」と意欲を失ってしまうリスクも考えられる。

私は、子どもが成長して、いずれしっかり自分の足で立つのを見届けた時に、お祝いの花束を渡すように障害を伝えることが望ましいのではないかと考えている。

2) 生活時間の乱れと不登校

ただでさえも、自律神経系統に弱点をもつアスペルガーの子たちだが、この時期、ホルモンバランスが乱れることにより、いっそう「眠れない」「起きられない」という悩みをもつケースは多い。生活時間の乱れが、不登校の引き金になることも考えられる。

不登校に至ってしまった場合、親もついつい夜更かし・朝寝坊を許してしまいがちだ。しかし、いったん昼夜が逆転してしまうと、学校へ復帰するハードルが高くなってしまえばかりか、その後の生活の建て直しが困難になる。

親が自己申告しない限り、医療機関や相談機関でも見逃されていることがあるが、生活時間が整えられているのかについて、専門家のチェック&アドバイスは必須と考える。

3) 性に関係する心配ごと

性にまつわる心配ごとといえば一般的に、自慰行為やネットなどから得る有害情報の問題が心配されるが、その中で、アスペルガー特有の問題として“性的フェティシズム”に注目したい。

“性的フェティシズム”とは、物品や生物、人体の一部などに異常に関心をもち、性的魅惑を感じることを指す。あまり公にはならないが、興味関心が狭く、固執しやすいアスペルガーの性的関心が偏ってしまうケースは多いのではないかと想像する。また、感覚機能に問題がある子の場合、布やストッキングなどの肌触りにこだわりを持ったり、ある特定の匂いや、舌触りに固執することも多い。さらにはそれが、性的欲求と偶然結びついてし

まうことも、十分考えられる。保護者の中には、子どもの性的な関心の偏りを心配する人も少なくない。しかし、個人的には、親が子どもの性的感性に干渉し、管理することには異論がある。日本の文化から考えても、性の問題に親が立ち入ることは難しいのではないか。犯罪に至るものでない限り、大目に見ておいても構わないと思うが、どうしても目に余る場合は、心理職などの専門家に委ねることを薦めたい。

4) 友人関係のトラブルといじめ

人間関係の構築に困難をもつアスペルガーの子にとって、思春期以降のクラスメートとの関係は、大変荷が重い課題である。特に女子の場合、思春期に入ると、学校での人間関係はいっそう複雑化する。場が読めない、思ったことを率直に口に出してしまう、ほかの子と興味が一致しない、アスペルガーの子が孤立してしまうリスクは高い。友人から否定されたショックが自傷行為につながったり、自己評価の低さから、極端に「自分をわかってくれる」と信じた相手へ、極端に依存してしまう傾向に陥る可能性がある。

また、多くの成人当事者が、いじめを経験しているという事実がある。おとなしいタイプのアスペルガー男子が、皆のストレス発散の対象としてからかい的になるというケースが一般的だが、中には、いわゆる“パシリ”として非行に加担させられることもある。人間関係に対するスキルは人間の中でこそ育つものであるし、将来的にはこの子らなりのスタンスで、豊かな友人関係を築くことは可能だ。しかし、思春期の混沌とした人間関係は、大人が干渉するのも難しく、この子たちには負荷が高い。不本意な人間関係に引きずられて、必要以上の痛手を負わぬよう、早い時期から“孤独に強い感性”をはぐくんでおくことも、ひとつの手段ではないかと思う。

5) 家庭内暴力と共依存

アスペルガーの犯罪はしばしば話題になるが、数々のデータから、むしろ他人に暴力をふるうのは稀であるということが示されている。それよりも注目すべきなのは、家庭内における暴力である。外では、おとなしいタイプの子が、自宅では母親に大怪我を負わせるほどの暴力をふるっていることも、決して珍しくない。

多くの場合、障害特性がダイレクトに起因となっているのではなく、“アスペルガーの子どもをもつ家族が陥りやすい共依存の問題”ではないかと捉えられる。他人との関係を築くことが難しい多くのアスペルガーの子にとって、母親はもっとも重要かつ必要な存在である。母子関係からスムーズに自立し、自己を確立していくことは、想像以上に困難な作業なのだ。

3. 思春期への対応

アスペルガーの子どもの思春期は、複雑にこじれてしまう時もある。しかし、存分にこじれて、また、それを自分自身の力で解いていくことが、彼らの深い思考力を育てるのではないかと期待する。確かに、彼らの自我形成は容易ではない。その迷宮を抜け出すためには、時間がかかるかもしれない。けれども、大いに悩み、大いに迷うことから、客観性や内省する力が育つ可能性もある。

私が運営にかかわる「高機能自閉症・アスペルガー部会」に所属するアスペルガー当事

者のこうもり氏(<http://uramonken.at.webry.info/>)は、「発達障害者は、健常者に比べて、ゆっくり時間をかけて育つ」と分析している。彼は、「そのため、発達障害者の就労適齢期は、概ね 30 代以降」と提言する。現に、成人当事者を見ていても、自分の不得意分野の仕事に就いてしまい苦労したり、真面目に仕事をやりすぎて鬱病になったり、仕事をする力があるのに人間関係でトラブルを起こしたり、まだまだ「自分の生きる道を模索中」という人たちが多く、さまざまな失敗や、挫折経験を積みながら、彼らは自分の力で自らを見出していく。中には、長い間、統合失調症を患っていたり、一時期はホームレスとして生活していたという人もいるが、その経験から形成された人格には奥行きがあり、尊敬に値する。

私たちは、彼らをできるだけトラブルから守りたいと過剰に保護したり、子どもの前の障害を取り除いたり、先回りの支援を行いがちだ。けれども、法を犯すことがない限り、悩める子どもへの干渉は避け、余分なプレッシャーはかけず、彼らなりの成長をゆっくりと見守りたい。複雑に入り組んだ自我の迷宮は、たとえ親であっても立ち入ることができない聖域なのだ。そこに立ち入ろうとすることが、先に述べた共依存関係を強固にしてしまうリスクは高い。

彼らの奮闘にエールを送りつつ、リラックスできる場所を提供することこそが、私たちの大事な役割なのだ。

著書

- ・「特別支援教育は今」
『教育新聞』(教育新聞社)2004年4月号及び8月号:取材&執筆
- ・「知的遅れのない発達障害への支援」
『ノーマライゼーション』(日本障害者リハビリテーション学会)2005年11月号:執筆
- ・「アスペルガー症候群をポジティブに受け止めるために」
『日本精神科病院協会雑誌』(日本精神科病院協会)2005年11月号:執筆
- ・「アスペルガー障害について 家族以外の支援者の存在がポイント」
『こころの健康だより』(日本精神医療保健福祉学会)2006年春号:執筆
- ・「発達障害のある子へのいじめ」
『児童心理』(金子書房)2006年6月号:取材&執筆
- ・「気がかりな子の背景にあるもの」
『児童心理:気がかりな子をどう理解するか』(金子書房)2006年10月臨時増刊号:執筆
- ・「家庭でできる支援」
『児童心理:気がかりな子へのかかわりの実際』(金子書房)2006年12月臨時増刊号:執筆
- ・『それぞれの戦争論』(唯学書房):企画編集
- ・『幸福の哲学 不幸の心理』(唯学書房):企画編集